Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-06-23

戸田唯巳の教育実践に関する証言（その2）　：　元教え子Yさんへのインタビュー記録

星川，佳加

(Citation)
研究論叢,26:33-47

(Issue Date)
2020-09-04

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81012434

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81012434

戸田唯巳の教育実践に関する証言（その２）

――元教え子Ｙさんへのインタビュー記録――

星川　佳加
（大阪健康福祉短期大学 / 神戸大学大学院博士後期課程）

はじめに

本インタビューの目的は、「戸田唯巳の教育実践に関する証言（その１）――元教え子Ｙさんへのインタビュー記録――」[1] に引き続き、戸田唯巳が1952年度から1954年度にかけて取り組んだ「学級というなかま」実践について、追究することである。

戸田は1919年に兵庫県美囊郡（現三木市）に生まれ、1939年に兵庫県師範学校を卒業した後、郷里の国民学校に勤務した。戦後兵庫県西宮市に移り、優れた教育実践を行ったことで知られている。特に、1952年度から1954年度に展開された実践は、これをまとめた著書『学級というなかま』(牧書店、1956) が第５回小砂丘賞を受賞し、この実践において発行された学級文集『星の子ども』及び一枚文集『星の子の広っぱ』が第４回全国児童文集コンクールで特選に選ばれるなど、高く評価されている[2]。

この実践は、子どもと子どもに「アミの目のようにつらなりの糸をはりめぐらす」[3] という特徴をもっており、子どもたちの関係の希薄化が問題となっている今日の教育実践に示唆を与えうるのではないかと考えられる。さらにこの実践は、1950年代に広く取り組まれた「仲間づくり」の代表的実践と位置付けられており、その理論的指導者であった宮坂哲文の生活指導論を再検討する手がかりとなる可能性がある。

そこで筆者は、この実践の実相を捉えるため、戸田の著書『学級というなかま』、当時の文集『星の子ども』及び一枚文集『星の子の広っぱ』の分析に取り組んでいる。また、この実践を実際に知る人物、すなわち当時の戸田の教え子にインタビューを実施している。これらの研究を通して、戸田の指導や実践の展開、学級における子どもたちの関係のみならず、その土台となっている町の様子や子どもたちの暮らしについても明らかにしたいと考えている。

その一環として、2019年10月６日に戸田の元教え子であるＴさんへのインタビューを実施した。調査対象者のＴさんは、西宮市立瓦木小学校において、４年生であった1952年度から６年生であった1954年度にかけて戸田の担任する学級に在籍していた子どもの一人である。大手企業に勤める父と、母と共に、小学４年生の時に西宮市に引っ越してきた。居住していた社宅は当時西宮市内で最も高層で、部屋から西宮球場（当時）を見下ろしていたという。文集『星の子ども』や、日記等に、当時の彼の暮らしがあらわれている。

Ｔさんとは、同じく元「学級というなかま」の一員であり、彼と同級生であったＹさんより紹介を受けて知り合うことができた。Ｔさんとの面談は、2018年７月より計４回行っ

1　星川佳加「戸田唯巳の教育実践に関する証言（その１）――元教え子Ｙさんへのインタビュー記録――」『研究論叢』第25号、神戸大学教育学会、2019年６月、pp.39-45。
2　『作文と教育』第６巻第６号、百合出版、1955年６月、p.74、p.80及び第８巻第４号、1957年４月、p.69。
3　三井為友「『学級というなかま』の教育実践について」国民教育編集委員会編『教育実践論』誠信書房、1958年、p.155。

てきた。その中で、1953年度と1954年度に発行された『星の子ども』『星の子の広っぱ』、当時の日記帳等、大変貴重な資料を拝借した。また、『学級というなかま』に登場する少年がTさんのことであることを確認した。その他これまでの面談で、当時の暮らしや仲の良かった友人などについても質問し回答を得てきたが、いずれも断片的な質疑応答にとどまってしまったことから、改めてインタビューを行う運びとなった。

これまでの面談を通してTさんと調査実施者との間には良好な関係が築かれており、この関係を土台としながらインタビューに臨むことができた。また、これまでの面談において聞き取った情報から、今回のインタビューの目的と方法を決定し、インタビュー・ガイドを作成することができた。さらに、Tさんは当時の文集や日記帳を保管されており、初めて面談した2018年7月頃から目を通して当時のことを振り返られていた。調査実施者との面談をきっかけに当時の友人と再会し、思い出話をする機会も持たれていた。これらの点において、面談を重ねてきたことには大きな意義があったと考えられる。

今回のインタビューでは、調査実施者の問題意識が調査対象者の回答に影響を与えることを避けるため、基本的にはエピソード・インタビューの方法を用いた。調査対象者であるTさんは人前で話されることにも慣れており、また調査実施者との間にも良好な関係を構築できているため、エピソードを語ることに対する抵抗が少ないと考えられた。ただし、より深めたい内容に関しては、調査実施者から追加の質問を行うこともあった。

調査実施者は、インタビューを通して、当時の生活や、学級の子どもたちの関係、子どもたちに対する戸田の姿勢について重点的に聞き取ることができるよう心掛けた。そのために、文集を参照しながら当時の戸田学級の名簿を作成し、事前にTさんに渡した。

以下の記録は、ICレコーダーによる録音データを書き起こし、それをもとに作成したものである。調査対象者であるTさんをT、調査実施者である星川をHと表記し、またインタビューに出てくる個人名も仮名で表記した。その他個人情報に関わる点等も、本記録上は割愛した。エピソードの文脈を捉えやすくするため、調査実施者の相槌等も省略している。

1．子どもたちの生活について

（1）「田舎」らしさの残る町並み

H：まず、子ども時代の生活について、あるいは町の様子等について、なにか思い出されることがあったらご自由にお話しいただいてもよろしいでしょうか、お願いします。

T：はい、私は瓦木小学校に転校する前は豊中の桜塚小学校に行っておりましてね、桜塚小学校は、戦争中、高射砲を、校舎の屋上に置いたくらいの立派な鉄筋コンクリートづくりの校舎でしたものですからね、そこからこっちに移ってきたら、「え、これ何？」と。木造の２階建ての小さい校舎でしてね、えらい田舎な学校やなというのが、一つの思い出。
と、それからもう一つは、今の山手幹線ですかね、あそこへ引っ越しのトラック、車に乗ってきたんですけども、あの頃は両サイドに建物があまり無かったものですから、飛行場みたいな感じがしてね、道路の幅が今でもそこそこ広いし、両サイドに建物が全く無かったもんやから。

H：ひらけてたんですね。

T：ええ。やからそれがずうっと西宮北口の方に、武庫川の堤防からあったもんで、これ飛行場やったんかなあというね、そういう思い出が、すごく印象に残ってま

すね。

それからもうその、今の松並町のその周りいうのは、甲子園口から松並町の我々の社宅のあったところまでは、そこそこ家が建ったりしていたんですけども、そこから北側、阪急電車まで、或いは阪急電車を越えての北側、建物全く無いんですよ。

で、畑、それから田んぼ、まあそういうような状態でしたからね。本当にあの虫取りとか、魚とりに対してはね、本当に環境の良い時で。春はイチゴ、イチゴ畑。それからイチジク畑。けっこうあのこの辺り今でも、そういうPRの仕方するんですけど、イチジク畑がものすごいありましてね。

で、イチジクの実が生りだす。それから田んぼになるという。せやから春は、そのイチジク畑を僕ら見に行ったらね、「おい、ちょっとやろう」とかね。

それからイチジク畑はそんなんしてくれたんやけれども、イチジクってのは水気が大事やから、畝の間にいっぱい水を入れてるんですよね。そのじゅくじゅくの所へ入って、イチジクの実をちょいともらって。で、食べたり。

それから、あの阪急電車の手前に、湧水がありましてね。そこはもう魚がようけおるし、その横の新堀川なんかも、もう魚がいっぱいおりましたからね。そこへ魚取りに行く。そこに貯水池がまばらにあったんですけれども、そこのおばちゃんが、僕らが魚取りに行くと、えらい親切にしてくれてね。ほいでなんか食べもんくれたと思いますよ。

H：ちょっとしたおやつみたいな。

T：そうそう。それから、あの新堀川いうのが今のそこの私らの社宅の横を流れてる川ですけどね、今はそういう鉄筋コンクリートで両サイドを補強してますけども、そのころはそういうあれ全く何もないので、気温は今ともう全然違うから、冬になったら、凍るんですよ。で、その水たまりがいくつかあって、凍って、その氷を割ると、もうフナ。ものすごい、いっぱいおる。ほんでそれをまずとって、持って帰って、前にもお話したかわからんけど、風呂桶に水入れて、えっらい怒られたわ。

H：ねぇ、お母様もびっくりですね。

T：もおね。それから夏は武庫川に川遊びに行ったりして、そしてちょうど淵底が崩れた状態で、そこが渦巻いとるんね。そこでおぼれかけたりしたり。ほんでたまたま誰やわからんけど、手引っぱってもろたから、なんとか溺れることなしに、今に生きとるんやなあって。

それからすすきがものすごい。河原ね。ほんでみんなそこへ行っては、小屋をつくるんですよ。ススキをこうして、ほんで中を刈って、ほんでくくって、ほいで小屋をつくったりしてね。隠れ家みたいな。

H：ススキの背が高いんですよね。

T：そうそう。そんなことして遊んだりね。まあ結構楽しく遊んでいました。

H：あぁそうですか。もうすごい自由に、この辺りを駆け回っていた様子がね、目に浮かぶようで…

T：そうそう。で、やっぱりあの頃やから大人の人もみんな結構子どもに優しくてね。畑の人なんかでも、「おい、ちょっとこれ持っていきや」とかね、そういうことはよく言うてくれましたしね。

H：じゃあまだまだ地域のつながりも、あるような。

T：そうそうそう。

（2）放課後の過ごし方

H：お住まいは社宅だったという風に今おっしゃっていましたが、社宅のほうの雰囲気というのはどんな様子だったんですか。

T：社宅には僕よりもだいぶ上の人が二人おったけれども、ちょっと我々と年代差があったから、よう遊ぶ仲間では僕が一番年長で。まぁガキ大将というより、なんやけども、一応いつもリーダーになっていました。みんなが「Tちゃん、Tちゃん」て言うから。んで野球の時とか、そんなんでもみんな、一番年上やいうこともあって、打ったら一番よう飛んだり。せやから、けっこうしてましたね。

ただうちのおふくろがね、石川県の出身でね、人付き合いがね、あんまり苦手ちゅうかね。だから近所の人なんか、あとはあんまり付き合いがないし、それから、外へ出たがらなかったですね。で、このS君の持っとった文集見たら、おふくろがなんか風邪かなんかで寝た時に、よう買い物に行ったとかいう、そういう記事ありましたけど、それ以外にも普段ね、いつもね、買い物に行かされてましたよ。

H：お母様にかわって。

T：そうそうそう。こういう買い物籠ぶらさげて、んで、何買うか紙に書いてもろて。ほやからもう、市場のおっちゃんやらおばちゃんみな「おう、また来たんか」言うてね。で、今は駅前もつぶれてしまいましたけれども、あっこがずっと市場でね、で、野菜、魚、ずーっと一回りしたら全部それ買えるから。でよう来るもんやから、顔を覚えといてくれて、ちょっと多分おまけもしてくれたやろう思いますわ。

H：ふふふ、おつかいに来たら思わずね、おまけしてあげたくなりますものね。その市場は、北口の方の市場によく行かれてたんですか。

T：いや、全部甲子園口。小さい時は。で北口は、おふくろなんかが行ってたんですかな。僕は自分で買い物に行くのはいつも甲子園口の、今の駅前の市場に、買い物に行ってましたね。

H：割と近い距離にね、市場が二つあるっていう風に聞いていたので。そうですか、じゃあ甲子園口の方におつかいに。

T：それから、まぁ僕は一人っ子やったから、家ではお菓子とかそういうもん、けっこう用意してくれとったから。んで、他のもんはみんな兄弟ようけあるからね、Tの家行ったらお菓子ようけあるでいうて、みんなよう遊びに来てくれましたよ。

H：あぁ、そうですか。例えばどんな顔が遊びに来たなみたいなことって思い出されますか。

T：せやからまぁ近所のね、社宅の子、ほんでから同級生では、St とかね、それからBも来とるし、Kも呼んだことあるし。それから Td、それから Sn、そんなんがね。Td、Sn いうんは家近くやから。Sn 君なんかもよう言うてますわ、Tんとこのお母さんにえらいお菓子をもろうたとか。

H：ね、フルーツポンチが大人気で。

T：そうそう。んでそれも、うちの僕のおばあちゃんがそういうね、ドイツ人の家庭に行ったりしとったから。そこで色んなそういうもんを習うとったんやろうね。それとか、ビフテキ。それから果物なんかも、バナナとか、そういうのもようおばあちゃんが買うてくれてましたよ。

H：まだ当時、生活には全然なじみがないものですものね。

T：そうそうそう。せやからまぁ、ありがたかったんやろうなと思います。

Ｈ：そうですか。それはもう、お友達もぜひ食べてみたいとばかりにね。

Ｔ：そうそう。もうフルーツポンチ出したらみんなビックリしてましたわ。これなんや、どうやんねんとか言うてね。

（3）思い出深いおもちゃ：電気機関車

Ｈ：特に遊びやおもちゃなどで、すごく印象に残っているものってありませんか。

Ｔ：うーん、おもちゃは、電気機関車。

Ｈ：今でいうプラレールみたいな。

Ｔ：そうそうそうそう。そんなん家に持っとるもんおらなんだから。うちへ来たらその、レールをね、セットして、モーターの電気機関車を走らすから、二間くらいずーっとつなげて。そういうので遊べるいうて、けっこうみんな楽しんで来てましたわ。

Ｈ：プラレールで心ときめくのは、今も昔も少年かわらないですね。

Ｔ：ほいで、電車を買うたら高いから、ボール紙で電車つくって、台車だけ買うて来てね、あとはつけて、連結器やらはみな売ってるから、その電気機関車でみなひっぱらせて、それでずーっと。

Ｈ：なるほど、モーター部分は一台で、後ろは工夫してアレンジして作られて。

Ｔ：そうそうそう。

Ｈ：それでもこのモーター部分を持っているところが、まずあんまりお友達には、ね。

Ｔ：そうやね。まぁ、せやから僕は瓦木に来る前豊中におったときに、一緒に遊んでたのがおって、そいつんところにもそれがありましてね。それがまたね、長さがこうで。今も年賀状はやりとりしてるし。本人はトヨタに行ったもんですから、名古屋に住んでるんですよ。けっこうええ家の子で、家も大きいし、庭も広い、そこの庭にね、レールをひいて、それで遊んでたんですよ。それをそのままこっちへ持ってきて、ほんで庭あれへんから、畳の上に線路ひいてね。

（4）思い出深い遊び：模型づくり

Ｔ：それでボール紙を切ったりしとって、そこから船の模型をね。

Ｈ：あの、前回見せていただいたあれにも書いてあった…

Ｔ：そうそうそう、ボール紙を積み重ねて、船の形にして、ぶらじる丸作って。戸田先生が、おいこれお前良くできたでって、展覧会あるさかい出したらどうやって。

Ｈ：そうですね、じゃあ原点は電車の模型作りだったんですね。

Ｔ：そうやね、それがはさみで紙切って、というあれで、そこから模型作りに入ったんやと思うわ。だからそのぶらじる丸だけなしに、連合艦隊をつくる言うてね、四十数隻作ったからね。部屋にざぁーっと並べて。

それはあの、いわゆる水上船の形だけのね。それで戦艦とか、あの頃はそういう写真やら本がようけあったからね、小松崎茂言うてね、戦記物をよう書く作家がおって、本が定期的に発行するからそれ買うてきて、それで色んな軍艦の写真載ってるからそれ見て、戦艦、航空母艦、巡洋艦、駆逐艦とかいうてね、それ40隻近くになったと思うわ。

Ｈ：40隻近く！もうそれだけで圧巻ですよね。

Ｔ：それをずーっと並べてね、じーっと眺めて。軍艦が出航するときに、陣形いうのがあるんですよ。いわゆる、航空母艦を一番真ん中にして、その横に戦艦がおって、で前後に巡洋艦がおって、その周りに駆逐艦が護衛しながら、それでずーっと、そういう形がその本にみな出てるか

ら、それを見ながらそれを並べてね。

Ｈ：なるほど、心臓部を守るような形で隊形が組まれていたっていうことなんですね。

Ｔ：そうそうそう、それで並べて、見ているだけやったけども。

Ｈ：でもきっとＴ少年には、海を渡っている姿が見えているんですね。お父様がね、お船の会社で働いていらっしゃって…

Ｔ：そうそう、だから中学生まではそれ作ってましたな。軍艦づくりね。

えーっと、前にちょっとお話ししたかわからんけれども、もっと大きい１ｍくらいのを作ろうと、戦艦大和をね。それは重ねるんでなしに、針金と金具を持ってきて、半田ごてで作って、ボール紙を外に貼って。

Ｈ：えぇ、骨組みから作られたんですか。

Ｔ：そうそうそうそうそう。

Ｈ：ぶらじる丸の頃から技術的には大飛躍してますね。

Ｔ：そうやね、ほんでスクリューつけて、そこにモーターで回すようにして。ほんで武庫川に持っていって、コロンってひっくり返って。そのころは重心という認識が全くなかったんや、要はボール紙でできてるもんやから、軽いから。下に重心を落とさんと、ひっくり返る。

Ｈ：浮かべるのが初めてだったんですね。

Ｔ：そうそう、そやから小学校高学年か中学のはじめくらいかな、どんくさいことにコロンと転がって、なんで？って。ほいで、また起こして、レンガ入れて、浮かべましたけどね。

Ｈ：レンガの重みにも耐えるような…

Ｔ：そら、そうそう、けっこう立派やったよ。外はボール紙やからけっこう頑丈やしね。

２．学校での様子

（１）学芸会

Ｈ：続いてなんですけれども、学級に焦点を絞っていきまして、休み時間や授業中や、あと学校での人間関係のようなものなども含めて、ざっくばらんにお話しいただけると有難いですけれども。

Ｔ：学校でいうのは、あんまり鮮明に覚えていることないけども、同じ社宅でね、僕より一年下に、Ｓちゃんいうのがおってね。その夫婦と、僕ら夫婦と、いつもここ 10 年くらいかな、旅行しているんですよ秋に。今年も 10 月の 26 日から。斑尾高原らへんのトレッキングやらなんか行く予定にしてるんやけど。

そのＳちゃんがね、よう言うんやけど、Ｔちゃんの学芸会が本当にビックリしたって、ちょうど劇の話になって、杜子春っていうのをやってね。僕が、杜子春をやっとったんよ。

そしたらもう、本当に、僕はそういう全然認識ないんやけども、セリフがものすごいあってね、そのセリフを、長いセリフを、堂々と言うとると。それにビックリした言うてね。

Ｈ：そうですか、ちなみに何年生の頃だったかって思い出されますか。

Ｔ：それはもう５年か６年やったとおもいますよ。Ｔちゃんはそういう杜子春の主役で頑張るけど、僕なにしたか言うたら、三匹の子豚の子豚で、後ろでちょろちょろおっとって、えらい違いやなぁなんて、未だにそれを。もうそれで旅行いったら僕を立ててくれる。

Ｈ：それほど鮮明に記憶に残るほどだったんですね。

Ｔ：本人はそんなね、記憶にあんまりないんやけど。でも、学芸会で中国服を、それはちらっと覚えてるな、学生服を反対側

に着て、ここへテープか何かつけて、それもおふくろが作ってくれたような。それは記憶してますね。

H：学生服っていうのは、普段から小学校に着ていかれてたんですか。

T：いや、卒業式かなんかで使うから買うとったんかな。

H：何かしらでご自宅にあった学生服を、ちょっとアレンジして主役の服に、そうですか。

（2）クラスでの様子

H：以前、Mさんにお伺いした話では、すごく照れ屋さんで、Tちゃんは私が守ってあげていたのよみたいなことを、お伺いしたのですが…

T：Mちゃんな、あれはもう強い子や、僕よりも背高いしな、お姉さん。Tちゃんはもう泣き虫やて、うちの家内にもいいよるんや。この間も電話、僕がたまたまおらなんだ時に、Tちゃんって泣き虫でね、おへそいろとってゴマ取ったらお腹痛くなった言うて、痛い痛い言うて泣いてるんよって、そんなこと家内にいいおって。

H：ちょっと照れくさいお話ですね。

T：僕は全然記憶にない。泣き虫いうか、一人っ子やからね。

でもけっこうYuとかね、守ってくれたいうたらおかしいけど、体大きいからね。いわゆる愛想よくしてくれたんちゃうかなと思いますね。

H：そうなんですか、じゃあクラスでけっこうYuさんとも交流がおありだったんですか。

T：そうそうそうそう、その頃はね。

であの、彼の文集にも書いてあったけども、家出したんかなんか知らんけども、武庫川どっかいったんやろうね。んで戸田先生から、おいTおまえちょっとYuがあれなんや言うて、ほいでたまたまあいつが武庫川の堤防の坂を下りてきて、おい、Yuおまえ、みんな心配してるでって言って走っていったような記憶があります。

H：あぁそうでしたか、あの給食費の…

T：使い込みかなんかで怒られてね。

H：その時の発見者が、Tさんだったんですか。

T：そうそうそうそう。

H：Tさん、すごい大活躍でいらっしゃいますよね、クラスの中で。

T：いやいや、そんな。そやから僕は武庫川の堤防に行ってな、さっき言ったすすきのところに隠れてるのを探したんとはちゃうんやで、たまたま降りてきたんを、家からでて、おーいYuいうて。

H：そうですか、でもそれでクラスの子に見つかったって逃げるのではなく…

T：うん、ちゃんと帰るって。

3．学級の子どもたち

（1）百姓の子、サラリーマンの子

H：Yuさんの話、初めて私多分お伺いしたような気がしてて、あんまり交流があるようなご様子これまで聞いたことがなかったので。もし他に印象的なYu君に関するエピソードとかあれば…

T：いやあ、あんまり無いね、やっぱりなんかね、地元の百姓と、僕らはサラリーマンの子どもでしょ、そうするとね、なんか知らんけどあんまり、こう、付き合いが無かったというか。

そやから学校出ると、すぐこっちの方へきて、松並町、熊野町、んでここら辺では女性やったらNさんとかね、Iさんとか、男やったらSとかTdとか、そのへんがみなこの辺におって、いわゆるサラリーマン家庭の子どもと、そういうもん

とよう遊んでたと思いますね。

H：そうですか、じゃあ暮らしの中では割と、分裂しがちというか、あまり交流のない…

T：いやまあそういう、完全に分かれているわけではないけれども、普通やけれども、学校終わったらすぐこっちへ帰って来とったから。

H：そうですね、おうちの方へもちろん帰られますよね。そうですか。それでもクラスの中では、そうやって守ってもらってたんじゃないかな、と思われるような関係性で…

T：そやねぇ、級長にもしてもろたり、そういうあれやったから。

H：なるほど、じゃあ Yu さんの方が、級長としての信頼をＴさんに寄せられていた…

T：いや、そういう信頼とかではないけど、普段の同級生というあれやと思いますけど。

H：そうですか、先ほどあのイチゴ畑の方とかにもよく遊びに行かれてたおっしゃってたので、そういう時に Yu さんと交流あったりとかは…

T：いやそれはもう、Yu なんかずっと西の方やからね、家が。

H：あぁ、じゃあＴさんが遊びに行かれてたイチゴ畑やイチジク畑というのは…

T：それはもう社宅の真ん前やから。

H：なるほど。あの、Yu さんのところがイチゴ畑やられてたっていう話を伺ったことがあったので、てっきり Yu さんのところに行かれたのかなと思ったんですけど…

T：いやいやいや、いわゆる西の方、Ｙとか皆西の方やから。やから放課後一緒にというのはあんまり、学校終わったらすぐ帰ってこいって言われてるから。

H：そうですね、放課後にすぐ帰ってきた後、社宅のみんなで遊ばれていたんですよね。

T：うん社宅の連中と、草野球、三人野球、三角ベースの野球をね、したりして。

H：うんうん、あの社宅の間の広場で…

T：そうそう。

H：そうですか。Ｂさんも社宅方面だったんですかね。

T：Ｂもそうやね、彼のところへ行って、ジュウシマツかなんか、いやそうか、あいつカナリアを飼うとったんやね。カナリアもええで、なんて話を聞いたりして、僕はジュウシマツを一生懸命飼うてましたわ。

H：うんうん、じゃあ鳥友達みたいなつながりもあって…

T：そうそうそう。

H：そうですか、Ｂさんはクラスではどのような様子だったんですか。

T：んー、Ｂはけっこう体も大きいし、ちょっとヤンチャ者やったと思うな。

H：体、大きかったんですか。

T：うん。

H：そうですか、じゃあヤンチャ者で…

T：なんかよくしゃべっとったと思うわ。なんでもわーわーわーわー言うたりして。

H：あぁ、けっこう積極的な…

T：うん、口挟んでくるあれやったと思うけど。

（2）サラリーマン家庭の子どもたち

H：そしたら順番にお友達の話とかも伺ってきたんですけど、一応簡単な名簿を先日…

T：この間送っていただきました。

H：特に印象に残っている方であるとか、或いはちょっとこの人なかなか思い出せないなっていうようなことってございます

か。

T：せやから男で言うと、このStね、それからTd、一番よう遊んだ。んで女性で言うと、N、I、んでからF。それからMいうのもおったんちゃうかな。それから当然、Kね。

H：その当然、というのは…

T：せやからまあ、これはそういうちょっと障がいがあって、んで戸田先生からちょっとKの面倒見たってくれとかね、それをいつも言われてたから。

H：あぁ、それは中学校に行かれるとき…

T：時もやし、普段から。小学校の時でも、ちょっと頼むでいうて、言われてたね。

H：そうですか、やっぱり級長という役割もあってですかね。

T：うーん、どやろね。それからSo。あとM、これね、ピアノが上手でね、相愛行ってピアノやっとったと思うわ。

H：そうですか、じゃあ進路と言うか…

T：そうそうそう。

H：としてピアノを選ばれるほどの、それはすごいですね。なかなかちょっと弾けるのよっていうレベルじゃないですもんね。

Stさんもね、すごい社会人になられて…

T：俺の勉強のライバルや。最終的にはこいつの方が上行ったけど。

H：今でもお会いになるって…

T：うん。神戸大学行って、んでESSに入って、英語堪能やから、んで住友銀行で海外勤務。せやから、スイスに長いこと駐在しとった。

H：あぁそうですか。Tdさんとかは。

T：Tdも今、年賀状くれてて、奥さんがアメリカ人。アメリカに行っとるときに結婚して、お前えらい外人と結婚して、かっこええなぁ言うたら、ユダヤ人なんや言うて。日本なんかと、日本人と結婚してくれるアメリカ人の女性いうたら、そんなアングロサクソンはあかんねんでって、で家内はユダヤやから来てくれたとかいうて言うてたわ。

H：そうですか、まだまだ今も白人至上主義がありますけど、より根強かった時代なんですかね。

T：そりゃもう昔やからね、今から50年くらい前やから。

よう、Tdとはよう遊んだわ。ここは兄さんとか姉さんがおったからね、やから皆大事にしてくれたわ、遊びに行ったら。

H：そうですか、年上のお兄さんお姉さんも、弟の友達やからって可愛がってくれて。

T：うん、それからそのSn君ところも兄さんと姉さんおって、よう話し相手になってくれたからね。

で、親御さんもみんな大事にしてくれたっちゅうか、子どもの、お金はないけどもな、お金はないけども、子どもに対する面倒見とか、それはみんなどこの家もやってくれたな。

H：あぁそうですか、じゃあSnさんのお家遊びに行かれたり、Tdさんのお家行かれたりしても、親御さんとの交流があって。他にお家に遊びに行かれたことがある方って、思い当たりますか。

T：家いったんは、こことここと、女の子の家はあんまりあがってへんな、ここは学校休んだ時に給食のパンを届けてやったことあるな。

H：あぁそうですか、どんなお宅だったんですか、Nさんは。

T：社宅、ごく近くの、東洋紡績の社宅や。

H：その社宅はTさんがお住まいだったような何階か建ての。

T：いやいや、ここはもう一戸建てやったわ、東洋紡績は。

H：戸建ての社宅がたくさん並んでたエリアにお住まいだったんですかね。
T：そうそうそう。
H：何があるんでしたっけ、お庭に…
T：うん、池や、Sn 君なんかも戸建てにね、お父さん三井銀行やったから。んで戸建ての社宅で、それで亀飼うとって。なんや 100 匹かになったって言っとったな。
H：文集に載ってましたね。
T：うん。でから St は、東京海上で、これは鉄筋やったわ、２階建てか３階建ての社宅。
で、Td は戸建て、当時の国鉄。
H：国鉄の方、すごい多かったんですよね。
T：そうそうそう、けっこうようけあったもん、この近辺に。
H：そうですか、ちょうどそういう、国鉄とか、大きい会社の社宅で、どんどん栄えていった時期なんですね、西宮。
T：そうやね、松並町のあたりはね。

（3）「西側」の子どもたち

H：それでさっき伺った話では、Ｙさんとか Yu さんとかはエリアの西側の方に住まれてて…
T：うん、そうそう。
H：他に西側方面であんまり交流も無かったかなっていう方って…
T：そやから僕らはそっちのほうにあんまり遊びに行ってへんからな。
せやけどこの残ってる文集なんかを見ると、結構、例えばＥと遊んだとか、名前は出とるな。
Yy がどうのこうのって、書いたりしとったから。
H：そしたらお家はちょっと離れてて、放課後の暮らしまではお互いあんまり知らないけど…
T：そうやね、うん。
H：それで例えば、暮らしが違う、それで価値観とか文化も違うわけじゃないですか。
それでクラスのなかで対立があったりとか、何か喧嘩が起こったりとかっていうことはあまり無かったんですか。
T：それはあんまり無かったね、だいたいそんなようなもんやって、みな戦後間もないころで、食べるもんやら着るもんやら色んなもん不自由な状態やから、我慢せないかんとかいうね。
これ Yy なんか、新聞配達かなんかしとったんやな。
H：あぁそうですね、Ｙさんも新聞配達の作品が残ってますね。
T：うん、せやからあの頃、そうやって配達とか、この頃子どもがそういうことやるいうことは無いけど、年寄ばっかりやけど、あの頃子どもがみんなようやっとったわ。もう新聞配達は子どもがやるもんやと思っとったな。
H：それは、Ｔさんのまわりの社宅にお住いの子も含めて子どもはやっていた…
T：いや、その近辺は無いわ。やっぱり西側や。
H：西側の方が長く西宮に農家とかで住まれてたっていうことなんですかね…
T：んでまぁ、地域の地理とか、そんなんもようわかるしな。で、そういうあれはあるから、頼みやすいというか、新聞販売店も。
H：それは配達に行って道に迷われたらね、新聞屋さんも困りますから。
T：誰の家やなんやってわかれへん。
H：そうですね、たしかに長く暮らしていたら、そのあたりもわかりますもんね。
またＹさんの話では、行動範囲がめちゃくちゃ広かったようなので、配達で遠くに出かけてもっていう自信もあったのか

もしれませんね。

（4）行動範囲

H：あんまり山の方に遊びに行かれたりとか、海の方まで遊びに行かれたりとかっていうことは無かったですか。

T：山言うのは、甲山には、社宅のグループと行ったわ。

H：それは子どもだけで、遠足のような感じで行くんですか。

T：いや、あれ社宅で行ったんかなぁ…なんかけっこうお姉さんやらなんやらおったぞ。どういうグループで行ったんかな。

H：小さい子どもだけでっていうのではなくって、何かこう企画して、計画立てて準備して皆で遊びに行くっていうようなことだったんですね。

T：うん、せやから僕はほんとにね、行動範囲が狭かったんやと思うわ。どこへでも行くなと言われとったから。北は、日野神社、阪急電車の際の。んで南は、国鉄甲子園口駅。

H：市場のあったあたりですかね…

T：そうやね、国鉄、JRの線路より南に行ったらあかんって。

H：ということはあんまり路面電車とかは馴染みがない。

T：うん、せやから、海水浴にね…

H：あぁ、当時は泳げましたもんね。

T：うん、行ったときには、路面電車に乗ったけど、それも中学、上甲子園中学から行ったんちゃうか。小学校で、皆で甲子園の浜へ泳ぎに行ったかどうか…ぼくはまた、よう泳がんねん。

H：そうでしたか、川はだってね、流れがちょっとあって…

T：せやけど溺れかけるくらいやから。
んで、おふくろがもうとにかくね、あれするなこれするなやったんや。自転車も買うてくれなんだ、危ないから言うて。

H：そうですか。もう心配なさって心配なさって大切に…

T：んでとにかく武庫川の東は行くな、尼崎のあっこはややこしいところやから、ああいう所は絶対行くな言うてね。んでから北は阪急電車まで、南は国鉄の線路のところまで、西は小学校まで。そう、もう限られとったから。
でまぁ実際僕らのときも、尼崎から、北口にと殺場あったからね。んでそういう牛が、モーモーて鳴きながら引かれていきよるから、あぁかわいそうやなぁって。んでから苺の季節は、尼崎から若い女の子が摘み取りの手伝いに来とるから。あんまり行かん方がええなぁと子ども心に思って。せやからほんと、行動範囲が狭い。

（5）「勉強」に対する姿勢

T：んでやっぱり、そういう転勤族の子どもいうのは、それなりに勉強ちゅうか、学力でもちょっと上の感じやったな。

H：それは何でなんでしょう。

T：やっぱり親が勉強せぇって言うからやわ。百姓の子どもらは勉強せぇって言われへんのやから。そんなもん勉強なんてせんでえぇ、田植え習てこいとか。

H：むしろ力としてね、労働の力として…

T：そうそうそう。

H：力を貸してほしいっていう思いがね、特にもう5、6年生にもなってくるとね。

T：そういうことがあるから、やっぱり勉強のあれは下がってきてるなという。

H：じゃああんまり学校の中で勉強勉強って言われてたっていうよりは、サラリーマンのご家庭では、ご家庭で声掛けが、励ましがあったという…

T：学校では勉強せえなんて全然言われなんだわ。

H：全くですか、そうですか。

T：うん、勉強せな大きなって苦労するでとかな、ええ学校行かれへんでとか、そういうことは一切無かったかな。

H：一切無かったんですね。当時からでも、算数の授業とか、国語の授業とかっていうのは…

T：あったね。せやけど戸田先生は、なんか算数やらなんかあんまり、得意でなかったんかな。あんまり無かったような気するな。

H：それよりは、思い出される授業っていうと、もっと別の授業になってくるんですかね。

T：うん。

H：具体的にこういう授業、ちょっと朧気に記憶にあるなみたいなのってありますか。

T：うーん、申し訳ないけど無いなぁ。

H：そうですね、なかなか授業の時間ってなると、子どもの生活からするとね。

T：そうそう。

4．戸田先生について

（1）「書くこと」に関連して

H：友達関係のことで、先ほどKくんのことを戸田先生から言われたっていうのがチラッとあったんですけども、Kくんを含めて、戸田先生から働きかけってありましたか、誰と仲良くせぇとか、誰と仲良くするなとか。

T：いや誰とというあれはないけども、瓦木小学校から行った、上甲子園中学にね、行ったもんを頼むでと。

H：なるほど、進学なさる時に…

T：うん、せやから、中学行っても話しかけたり、そういうのは頼むでというのはありました。

H：じゃあもうクラスも離れて、ほかの中学からも来るなかでも、つながり合っていってねっていうような働きかけがあったと。

T：うんうん。

H：なるほど、その４年生とか５年生とか６年生の段階で、そういうような言葉がけってありましたか。

T：いやぁそらもう、普段は無かったですよ、戸田先生は、自然の流れというかね。そやから、自分のあれでもってこいつをこういう風にとか、それはあんまり無かったんちがうかなと思いますよ、その子ども自身がずーっと、ねじれることなく大きくなってくれたら良いなというあれじゃないかな、無理にああせぇこうせぇという、それは無かったですね。

H：そうですか、今そのように思われる理由とか、それにかかわるエピソードとかって…

T：いやぁ、それは無いけども、そやからまぁ、面と向かって褒められるとかな、そういうことはあんまり無かったね。

H：褒められることも、あんまりなかった…

T：うんうん、せやからまぁ日記をね、１週間にいっぺん出して、そこにはちょろっと書いてあるよ、頑張れよとかね。これはようやっとってくれたなぁとかね。あるけども、顔合わしてる時にどうのこうのいうのはあまりなかったと思うわ。

H：そうですか、そのお姿を思い返すと、自分の意図で子どもをどうこうというという、意図は無かったんじゃないかなと思い出される…

T：うん、と思うね。

H：なるほど、それはじゃあ逆に褒めるだけじゃなくて、注意するとか、叱りつけるというようなことも、そんなに面と向かってっていうのは無かったんですかね。

T：やっぱりあの、僕思うにね、例えば会社

やら色んな社会に出てからでもね、会社の中でも、お前はなんやと、なんちゅうことをするんやお前は、アホとか、そういう面と向こうて言うよりも、手紙でね、お前この間ああいうことあったけどね、それはこういう風にした方がええんと違うかな、というね、手紙でね本人に、僕２回か３回か会社であるわ。

Ｈ：そうですか。

Ｔ：うん。んでＴさんからああいう手紙もらってそれを読みながらね、と思いましたって、だから口で言うよりね、手紙も今はもうこれやけど、こういう時代になっても、肉筆でね書いて、相手に伝えるいう、それは効果100倍するというふうに思います。

Ｈ：そうですか、それは大人になられた後の経験から…

Ｔ：うん、やから先生がああいう日記のところにね、ちょこちょこっとコメントあるでしょ。あれがもうほんと、ずーっと続いて積み重なって、何がしかの、口では言えんけども、自然になんかこう僕自身に影響してるんと違うかなて思いますね。

Ｈ：自然と影響する…

Ｔ：うんうん、やけどももう、面と向こうてね、無理やりいうんはね、しこりが残るんよ。やから僕なんかでも、会社へ行って、なんかしてあいつこういう風になってくれたらええのにな思う時は、３回ほど手紙書いたことあるわ、後から本当にありがとうございました言うて、お礼言われたわ。

Ｈ：それはまた手元に残りますから、長く心の支えにもなりますから、そんな素敵な上司羨ましいです。

Ｔ：いやいやいや。

Ｈ：じゃあそういった文章で、手で書いた言葉で思いを伝え合うというのは、ご自身が子どもの頃は戸田先生との関係で経験なさって、ご自身が社会に出られてからは自分が今度は贈る、言葉を贈る立場として、続けられてきたってことなんですね。

Ｔ：やからそれもやっぱり、先生の学年、学級におって、詩をつくる、作文をつくる、それがもう影響してるんやと思いますけどね。やから僕はその手紙書くのにあんまり苦にならない。

せやから、あしながで葉書が来ると、すぐ返事書いてやる。そういうのはあんまり抵抗感ない、これはたぶん、小学校の頃に詩やら作文をした、そういうのが自然に身についてるんかなと思いますけどね。

Ｈ：なるほど。ちなみに今まさにおっしゃったようなことが、戸田先生の意図するところとして、ご著書に残ってるんですね、書くことに抵抗感のない子どもを育てたいというような願いが、書かれてるんですけども…

Ｔ：あぁそうですか。

Ｈ：はい。そういった戸田先生のご著書って今まで読まれたことはありますか。

Ｔ：いや…

Ｈ：良かったです良かったです。もし読まれたうえでおっしゃってるんであれば、やっぱり先生のご著書の影響を考慮しなきゃいけなくなってくるんですけど…

Ｔ：あぁ。

Ｈ：逆に読まれてないということは、先生の願いが本当に届いていたっていうことなので、今すごく大変貴重な証言をいただいて。

Ｔ：あぁそうですか。

（2）「点数を取れる教育」の不足

H：今お話しの中で、戸田先生のお姿も少しずつ話していただいてて、すごく戸田先生の良かったところとか、こういったところが素敵だったみたいな風に受け止めさせてもらったんですけど、やはり研究をしていく立場ですので、戸田実践の功罪と言いますか、やっぱりいろんな角度から見ていく必要があるなというのはすごく切に感じているところなんです。それをぜひ、戸田先生のクラスの一員だったＴさんの言葉で聞かせていただけるとありがたいんですけども、その功罪、両面含めて思い浮かべられることって何かありますか。

Ｔ：いやぁ、まぁあの、うちのおふくろなんかはね、やっぱりその、戸田先生にもうちょっと数学やら、国語やら、そういうことを勉強させてほしかったみたいなことを言うとるね。

詩やら作文書かすのは、それはそれでええんやけども、もうちょっとなんか中学、高校、で次に大学やろうけども、そういうことに対しての、要は点数を取れるような教育をしてほしかったいうようなことを、時々言うとったな。

H：なるほど。その点に関して、Ｔ少年はそうかぁと思って恐らく聞かれてたと思うんですけど、今ご自身の今までをふり返られて、どのように思われますか。

Ｔ：まぁそらやっぱり、自分自身の努力によるもんやろうと思うし、例えば St なんかは灘中学に行って、神戸大学行っとるし。んでから I いうのは、灘行って、京都大学行っとるからね。だから、お前はどこ行ったんやいうたら大阪府立大学やから。その違いは、やっぱり自分自身の以後の努力のしかたやから、勉強のしかたになるんやろうから。それはもうそれで、今自分の人生ふり返ってみても、他の周りの同級生から見ても、まあまあの生活を過ごしてきたんやから、これはこれで贅沢言うべきやないなと思って、満足せないかんと。

H：そうですか、この３年間に中学校、高校、大学につながっていくようなお勉強をしてたかしていなかったかは、あんまり問題ではないんじゃないかという風に…

Ｔ：そうそうそうそう。

H：今のご自身は捉えられてると。で、実際に灘に行かれて、神戸大や京都大に行かれたお友達もクラスから出ていると。

Ｔ：うん。

H：Ｉさんでしたっけ、京都に行かれたの。

Ｔ：うん、これは、中学は上甲子園中学やってん、で高校から灘へうつってん。

H：高校から、そうですか、お家とかはちなみにどういった…

Ｔ：これもサラリーマンのあれやったわ。

H：あぁそうですか。なかなか I さんの話はちょっとこれまで、出てきたこともあったかなぁと…

Ｔ：うん、おとなしいやつやわ。地味なやつや。まぁ背高くて、で、男前やけどな。

H：あらそうでしたか。

そしたら戸田先生の教育の、ちょっと批判的に捉えられる視点の一つとしては、教科の勉強っていう点に対する力の入れ方…

Ｔ：うん、まぁせやから今の時代になるとやっぱりもう難しい教育のしかたやと思うね。

（3）人生における影響

Ｔ：いやそれと、僕は星川さんにお会いして、それで改めて、我が家にあった文集みたり、Sn 君のあれを借りたりして、あぁそうやったんや、こういう生活をしとっ

たんや、先生はこういう風にやってくれてたんやないうことでね。自分が小学校出てからしばらくはそら戸田先生の上甲東園の家へね、遊びに行ったりなんやしてたんやけども。2009年まで先生長生きしておられたのに、わしあれやな、大学やらそれから後の、全然戸田先生のそれが頭に無かったなと思うと、本当に、申し訳ないちゅうか、残念というかね、そういう思いが今、強くなってきましたわ。

Ｈ：そうですか。戸田先生にしてみると、おそらく本望だったんじゃないかなと私は思うんです。さっきおっしゃったみたいに、子ども自身がねじれずに、まっすぐ伸びていってほしいっていう願いを持たれてたんじゃないかって、おっしゃったじゃないですか。

もうまさに、私もそうじゃないかなって思いながら、戸田先生を読み解かせていただいてて。その時に、「あぁあの先生のおかげで」って、一生影響を、強い影響を与えるような在り方は、恐らく戸田先生ご自身も望んでなかったんじゃないかと思うんです。なので今の、しばらくは連絡も取り合ってたけど、すっかり忘れていたっていうのは、むしろ戸田先生の教育の価値を語るうえですごく重要な証言だなと思っております。

Ｔ：そうですか。逆にそういう風に言うていただいたらね、ちょっと私自身も気が軽くなったというかね。

いや本当にね、星川さんにお会いしてから、戸田先生のことを思い出して、あぁせやせや、わしは竹中郁さんになんかあんなしたで言うから、全国版の詩集に詩を載せてもろたり、それから朝日放送であんなんしゃべらしてもろたり、ものすごい色々な、いわゆるエポック、自分自身としてはエポックメイキングなことを経験さしてもろて、それでなんやもうそれで、先生のことキレイに忘れてしもうて、あら申し訳ないなという気持ちがずっとあったんやけども、今そういうふうにおっしゃっていただいてね、ちょっとは気が楽になりましたわ。

謝辞

本記録の作成にあたり、Ｔさんには長時間にわたって多くの貴重なお話を聞かせていただきました。またＴさんには、今回のインタビューまでにも、同級生の方をご紹介いただいたり、文集などの資料を見せていただいたりと、大変お世話になりました。この場をお借りして、心より感謝申し上げます。